

「現代」を拒否する人々

池田明史

さまよえるユダヤ人

ヨーロッパの古い伝説に「さまよえるユダヤ人」という奇譚がある。キリストの呪いを受け、あるいはその磔刑の目撃証人として、キリスト再来までの永劫の時間を「不死」の身で徘徊する宿命を負わされたユダヤ人の話である。ヨーロッパ中世には、このユダヤ人を実際に見かけた、どこその都市に現れたといった風説が引きも切らなかつた。もちろんその実態は、各地を流浪して生計を営んでいたユダヤ人行商人をことさらに「異質化」しようとしたキリスト教世界の暗い想像力の産物でしかなかつたろう。

しかしそのイメージは、文学や絵画に格好の題材を提供し、わが国でも芥川龍之介が掌編「さまよへる猶太人」をものしている。そこに形容されているユダヤ人の格好といえは、「上衣は紫で腰までボタンがかかかっており、ズボンも同じ色」で、「靴下の色は真っ白であったが、リンネル製か毛織りかはわからず」、「髪も髭も共に白く、白い杖を持っていた」とあるように、先ず

以て異装と呼ぶしかない代物であった。これは必ずしも芥川の創作によるものではなく、長い髭を蓄え旅に疲れはてたといった様子のヨーロッパのユダヤ人行商人の一般的な姿から膨らんだイメージを、忠実に描写して伝えたものと言つてよい。

イスラエル社会の
「ハシディーム」

イスラエルという「祖国」を建設し、もはや「さまよえる」過去から訣別したはずの現代のユダヤ人の中にも、われわれにかつての伝説を想起させるような特異な装束で日常を送る人々がいる。ハシディーム（敬虔派）あるいは超正統派と呼ばれる一群の人々がそれで、ユダヤ教内部の神秘主義的運動の流れを汲む彼らにとっては、十八世紀東欧のゲットーでの生活を現代においても固守し続けることが何よりも重要と看做される。髪を房にして耳の横に長く垂らし、シュトライメルと称される毛皮の帽子や鏢広のシルクハットのような帽子を被つて、黒い上着に黒いズボンで身を固めた彼らの格好は、彼らの先祖がゲットーで暮らして



エルサレム旧市街の「ハシディーム」

いた頃そのままである。それはまた、彼らを周囲の現代社会から隔絶する効用を果たしている。

現代の一般

ユダヤ人との対比

「離散」生活を強いられていた頃には、ユダヤ人はゲットーに押し込められていただけではなく、「マゲン・ダビド（ダビデの星）」と呼ばれる標識や黄色い布切れなどを着衣につけさせられ、一目でそれとわかるようにされてきたことが多かった。自前の国家を手にした今、イスラエルのユダヤ人の服装は、概して言えば欧米世界一般のそれと特段に変わるところはない。もちろん大多数の国民は、それなりにユダヤ人としての習俗を尊重し、必要に応じて帽子を被るなり頭や身体を覆うといった手間を惜しまない。特に、ユダヤ教「保守派」に属する人々（男性）は、普段でも神への畏敬を表すため「キツパ」という円形の頭頂部覆いを着けたまま過ごしている。この「保守派」は、近代ユダヤ教において二つの極をなす正統派と改革派との中庸を採る流れだが、その中でもキツパの色が黒に近づけばより正統派に近く、青など明るい色になればなるほど「リベラル」な立場にあること



子供も正統派の装束で

人のわれわれにはどこか馴染めないものが付きまとう。もとより、創造主と被造物との間の恍惚の合一を信奉する彼らハシディームにしてみれば、その異装にもそれなりの神秘主義的解釈がある。彼らはネクタイを拒否するが、それは本来は補完しあって「神に仕える」べき「心」と「脳」とが、ネクタイによって隔離されることを避けるとの理由による。また、腰の部分に数カ所垂らされる紐については、人間の上半身と下半身とを分離する象徴と捉えられている。

隔離集団のなかで 貫く固有の生活

頑なに「現代」を拒み続けるこれらの人々が個別に暮らしていくことは不可能であり、エルサレムではメア・シアアリーム地区、テルアビブではブネイ・ブラック地区というふうには、ハシディームは都市ごとに独自のコミ



日々の買物もこの姿

を示すというのが俗説である。われわれが馴染んでいる洋装とこのキツパとの取り合わせは、目にした当初は戸惑わされるが、慣れてしまえば違和感は薄れる。これに対して正統派からも突出した存在であるハシディームの服装は、

ユニティを形成していわば集団の「棲息圏」を確保している。鬻鬻を買うことを承知で告白すれば、私はエルサレムに住んでいた頃、密かにこうした地区を「ペンギン村」と呼んでいた。黒い帽子に黒の上下、胸元に白いシャツが覗く彼らハシディームが集団で徘徊している様子は、失礼ながら遠目にはあたかもペンギンが群れをなしているかのように映ったからである。

ペンギンにも皇帝ペンギンや王様ペンギンの別があるように、ハシディームの服装もその集団のそもそもの出身地や帰属セクトによって微妙に違っている。ユダヤ教の祭日に、エルサレム旧市街の名高い「嘆きの壁」を訪れると、そこはありとあらゆる種類のペンギン・ルックで溢れ返っている。彼らはそれぞれ壁に向かって祈りを捧げているのだが、独



スコット（仮庵の祭り）

特の節回しで祭文ならぬ聖書を読み上げ、調子をとるためにピョピョコとお辞儀を続けるものだから、不謹慎だと思いがちながらもますます彼らがペンギンに見えてくるのである。もつとも、神との契約を忠実に履行している彼らの側からすれば、われわれ「ゴイーム」すなわち異教徒や、ユダヤ人であっても契約の履行を放棄したいわゆる「世俗派」の人々は、いわば「人にして人に非ず」といった存在なのであろう。彼らのわれわれを見ること、あたかも人間がペンギンを見るかのようなものである。まあ、お互いさまというところか。

崩壊した旧ソ連から百万人に上るユダヤ人がイスラエルへと流れ込んでこようというご時勢である。ハシディームの風貌にヨーロッパ中世の伝奇的存在である「さまよえるユダヤ人」の面影を求めるのはナイーヴに過ぎよう。しかし、ゲットーからの解放を旗印とした近代シオニズムの所産であるイスラエル国家にあつて、その国家をさえ認めないハシディームの人々がこのように自らを隔離し、かつてのゲットーさながらに固有の生活を貫いている有り様は、まことに奇観というほかない。

ちなみに、件の「さまよえるユダヤ人」の目撃談であるが、ヨーロッパでは一七二一年のミュンヘンに現れたのを最後に、またアメリカでは一八六七年にモルモン教徒の一人が出会ったと伝えられて以来、その踪跡は杳として知れない。

(いけだ あきふみ／アジア経済研究所中東総合研究プロジェクト・チーム)